

【臨床・研究】

冠動脈心疾患死亡における日本の
パラドックスは肥満により説明可能か？

いずみ 泉 のぶ お 夫

キーワード：冠動脈心疾患，死亡率，若年成人男性，肥満，日米比較

要 旨

思春期の肥満は若年成人の肥満と関連しやすく，肥満は若年成人期に最も増加する。若年成人期には，冠動脈心疾患（CHD）の発症やその死亡数は少ないが，それへの肥満の危険因子としての役割は高齢者より大きい。他方，日本人と，米国の白人と黒人のCHD死亡率を若年成人男性で比較すると，黒人>白人>日本人の差は顕著であるが，遺伝的因子の役割は小さいとされる。若年男性の危険因子の保有率は，現在では総コレステロール値の差は僅かで，高血圧と喫煙者の割合は日本人で高い。肥満度は黒人>白人>日本人である。肥満は危険因子として，高血圧や脂質異常を介するのか，それに加え独立した作用も持つのか明らかでない。後者の可能性を日米比較から探った。

はじめに

冠動脈心疾患（CHD）の危険因子には脂質異常，高血圧症，喫煙の3大因子に加え，肥満などもある。肥満の作用は，合併する脂質異常や高血圧症を介するか¹⁾，それに加え独立しうるか²⁾，明らかでない。この問題は，小児・思春期の肥満対策にも大きな意味を持つ。

CHD死亡率は，先の大戦後より今日まで日本は欧米に比し際立って小さく，動物脂肪と総熱量の摂取が少なく，総コレステロール（総コレ）値

が低いためとされた。しかし，食生活の急速な欧米化により，1990年代には総コレ値は欧米に匹敵した。さらに，日本人男性の喫煙率は高く，高血圧症も同等以上であるのに，状況は変わらず，日本のパラドックスともされる³⁾。ハワイや米国の日系人のCHD発症・死亡率や冠動脈の石灰化率は高く，遺伝要因が主因ではない³⁾。

日本の肥満の状況は欧米より良い。日本のパラドックスが肥満により説明可能なら³⁾，肥満の独立した危険因子としての役割は相当に大きいことになる。

小児・思春期の危険因子対策の観点から，若年成人男性の肥満の状況と心疾患死亡率との関連について考察した。

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科

連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613